

# カメラが追った全道展

「作品搬入から地方展開催まで」

②

①



① 公募作品の搬入受けが始まった。傷つけぬよう、種別、大きさ別に分類され、作品はみるみるうちに山を築いていく。

② 去年の搬入は1,132点、受け簿とひき合わせ、翌日の審査にまごつかぬよう整理するのが大変だった。

③ 各地から集まった会員が勢ぞろいする。審査開始——毎年のことながら緊迫した空気、アルバイト君は2日間歩き通しである。



④

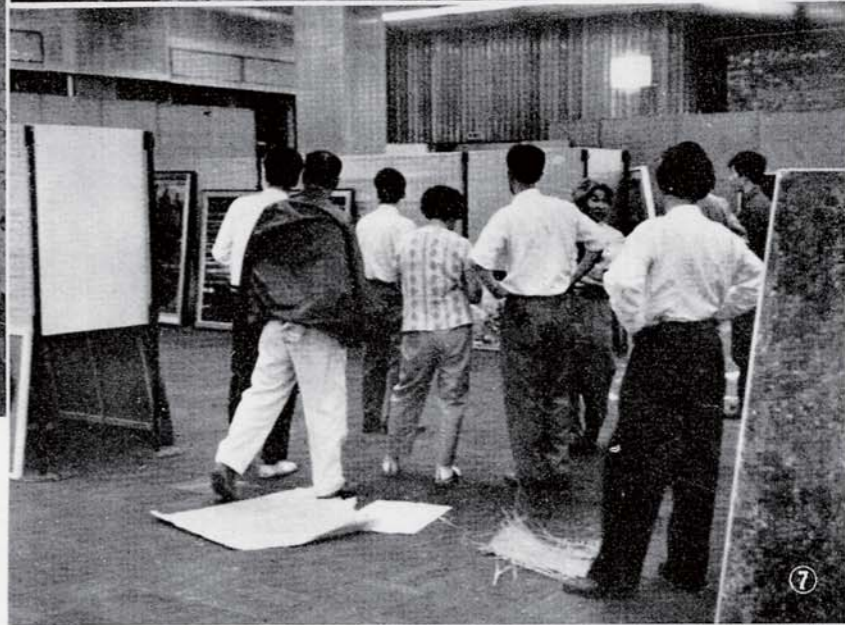
④ 当落は挙手による多数決。しかしその前に作品は穴があくほど見つめられる。一つのタッチ、一つの線まで。(北海道新聞社提供)

⑤ 1人の作品をめぐる納得の行くまで議論を戦わせるのがこの世界のよいところだ。「数の暴力」はここでは通用しない。



⑤





- ⑥ 入選決定、陳列作品を会場に運ぶ。ガラとした休日のデパート。さて、どれをどのよう  
に並べるか、これがむずかしい。
- ⑦ 「この部屋の並べ具合どうだい?」「正面あの2点、入れかえた方がきれいじゃない  
かな」「いや、かえって悪くなるよ」
- ⑧ 男性の会員の重労働の間、女性の会員は名ふだ書きという仕事がある。何時間も書  
くと腕がだるい。絵なら平気だけど……。
- ⑨ 第14回全道展にぎやかに開幕。厳選されたが会場はすつきりと整理された。開場を  
待ちわびた出品者が早くも顔を見せる。(北海道新聞社提供)
- ⑩ 評判が悪くないので安心した。こればかりはひとり相撲じやなり立たないので、作品  
を見る真剣な目にあうとほつとする。
- ⑪ なごやかなふんいきだと思つたらこの受け嬢の笑顔のせいだ。進呈して着てもらつ  
たこのしやれたのが全道展ゆかた。
- ⑫ カメラをとり出したのは原精一氏、会場には来道中の作家も必ず訪れる。わざわざ会  
期に合わせて旅行の日程を組む人もある。
- ⑬ 彼の受賞するよろこび。ふと昔を思う先たちの感傷。そしてつと多くの人たちの  
来年こそはという食い入るような目。(北海道新聞社提供)
- ⑭ 札幌展終了、休む暇なく地方展のために品が送られる。りつばな壁とはいえないが  
意義の深さはそれを補つて余りある一室

